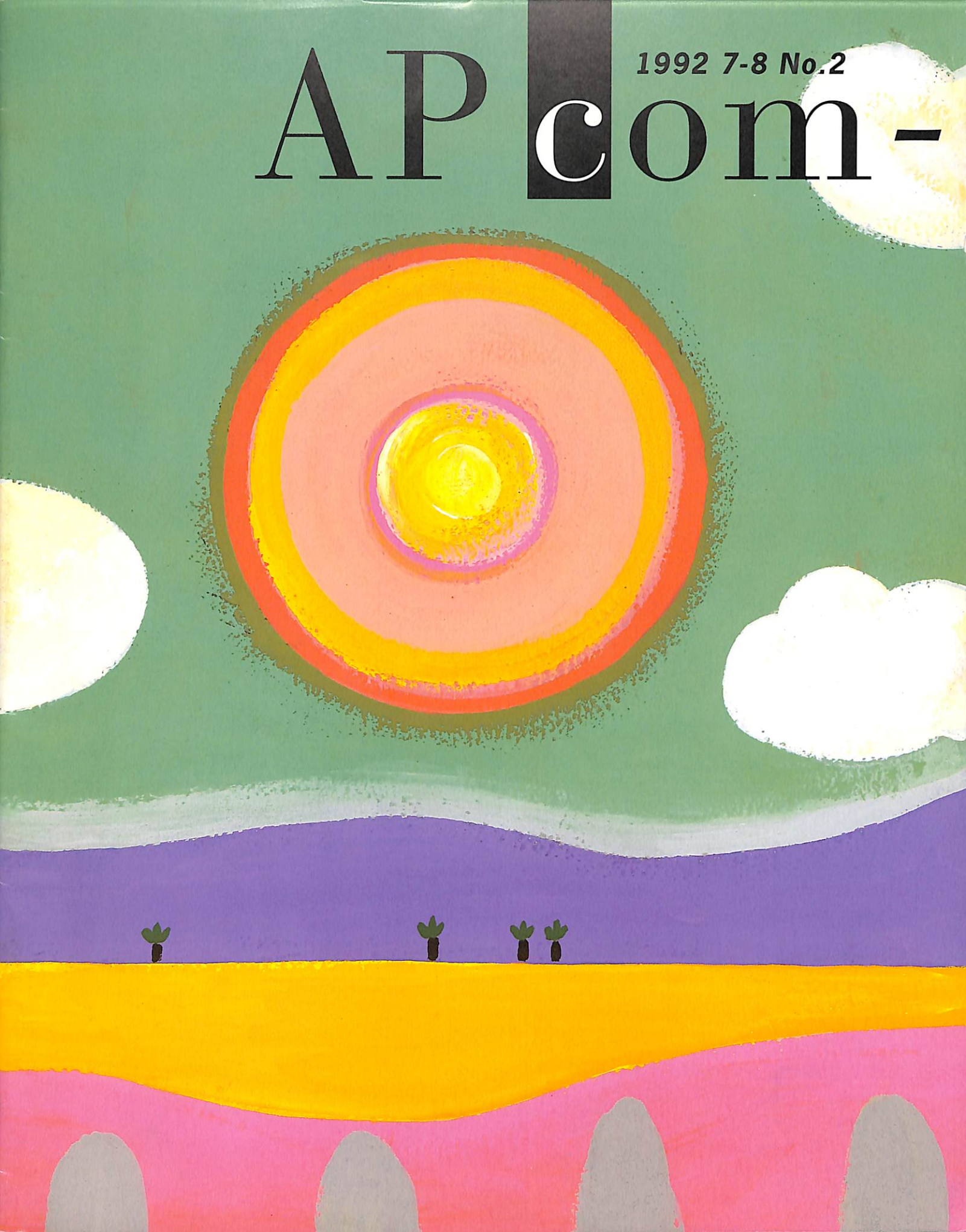


AP com-

1992 7-8 No.2





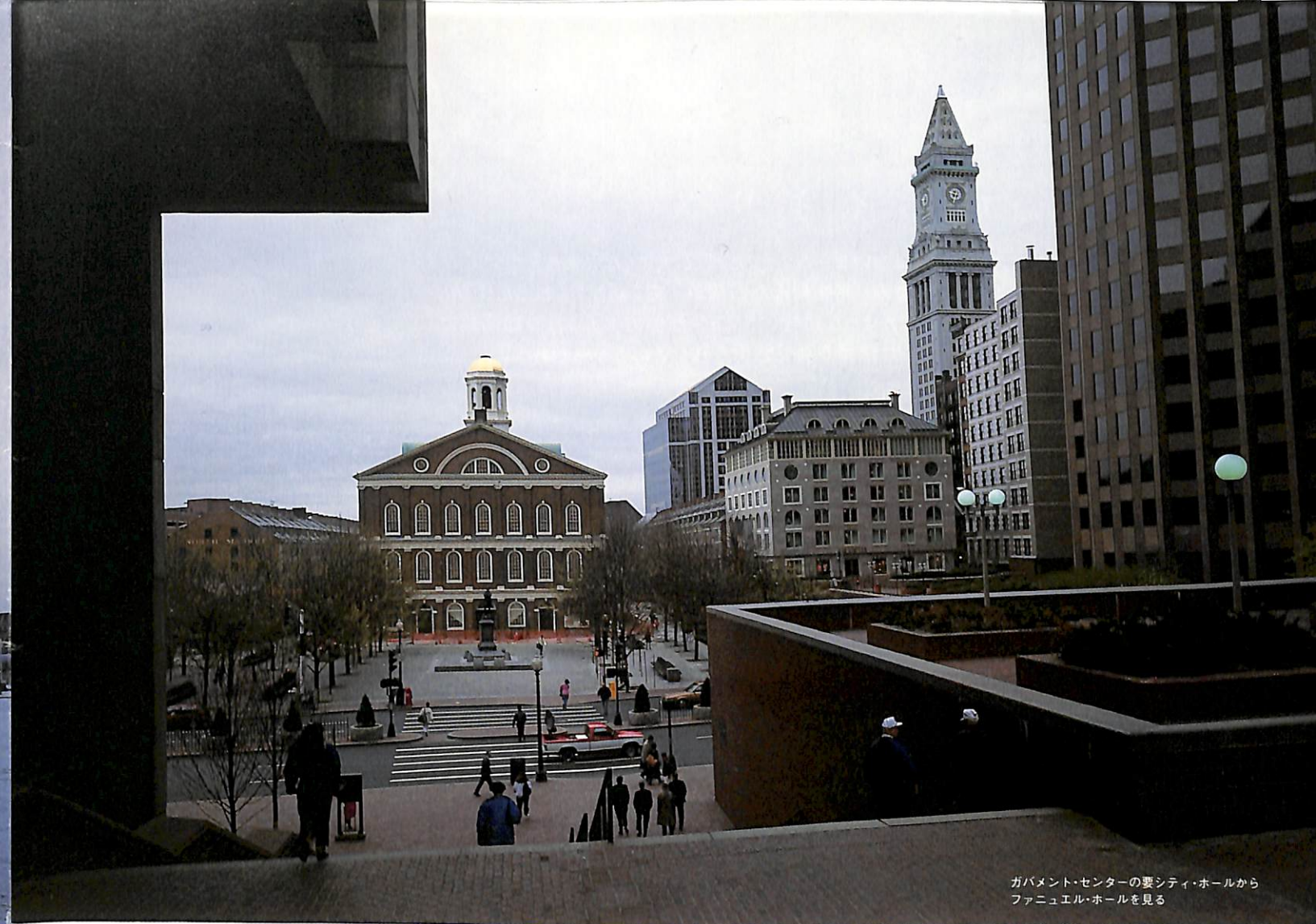
巨大ビル群がボストンの新しい顔になりつつある。
サウス・ボストンからウォーター・フロントを望む

ボストン アメリカ建築の生きられる博物館 BOSTON

写真…伊奈英次

CONTENTS

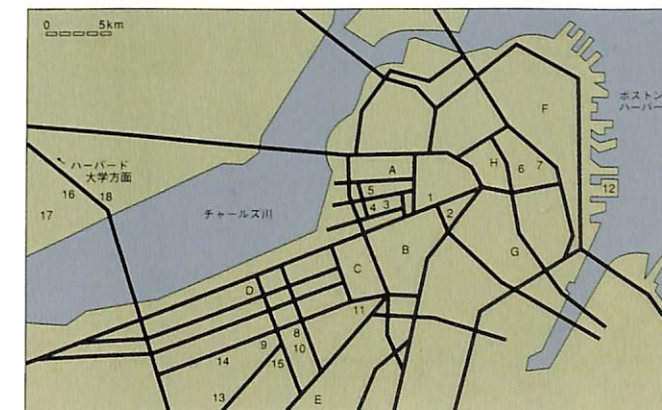
AP com-REPORT 世界の建築文化を訪ねて ② ボストン／アメリカ建築の 生きられる博物館	古きよきボストンと ボウ・ウィンドウ 小林正美	ボストン・ ミュージアム・ガイド	ボストンの 都市と建築を知るキーワード	AP com-AREA STUDY 販売店のあるまち ② 山梨・富士吉田市 小佐野工業(株)	AP com-FORUM ARCHITECTURE VIEW UP あじろ-I、II／城山JT森ビル	INFORMATION 第1回ジャパンエキスポ富山'92／ 第16回全日本少年サッカー大会／ アルミ製乙種防火戸通関認定の お知らせ
1	11	13	15	17	21	25



ガバメント・センターの裏シティ・ホールから
ファニエル・ホールを見る

アメリカ最東部、大西洋岸にある州都ボストン。

1630年、新天地を求めてイギリスからやってきたピューリタンは、この地を彼らの夢の実現のための出発点にさだめた。貧しくも理想に燃えたピューリタンの、自由と独立の証ともいえるまち。ボストンはアメリカ人にとって、いわば建国の聖地だ。都市としての魅力を十二分に備えたボストンは、また建国以来のアメリカ建築の理想が生き続けているまちでもある。世界の建築文化を訪ねる旅の2回目は、この聖地への巡礼を試みることにする。



- | | | |
|---------------|--------------------|---------------------------------|
| A. ビーコン・ヒル | 1. マサチューセッツ州会議事堂 | 11. ヘリテージ・オン・ザ・ガーデン |
| B. ボストン・コモン | 2. パークロウ | 12. ロウス・ワーフ |
| C. パブリック・ガーデン | 3. スワンハウス | 13. クリスチャン・サイエンス・センター |
| D. バック・ベイ | 4. 29Aチェストナット通りの住宅 | 14. プルデンシャル・センター |
| E. サウス・エンド | 5. ルイスヴァーグ広場 | 15. コブレイ・プレイス |
| F. ノース・エンド | 6. ファニエル・ホール | 16. クレスグ・オーディトリウム、
クレスグ・チャペル |
| G. ダウン・タウン | 7. クインシー・マーケット | 17. ベーカー・ハウス |
| H. ガバメント・センター | 8. トリニティ教会 | 18. マクローリン・ビル、
ロジャース・ビル |
| | 9. ボストン公共図書館 | |
| | 10. ジョン・ハンコック・タワー | |

ROWHOUSE

アメリカの中のイギリス

ボストンは、アメリカであってアメリカではないまちだ。その決して大きくないまちを歩いてみると、そのことがよくわかる。れんが積みの家並み、時を刻んだ石畳み、細く曲がりくねった街路……。どこかヨーロッパの古い都市に迷い込んだような錯覚。ボストンが他のアメリカの都市にはない深みをもつのは、ピューリタニズムの精神が強く影響を残しているからであろう。



29Aチェストナット通りの住宅 設計：ブルフィンチ(1800)

高層ビルが幾層にも立ち並ぶ超近代的なまち、これが旅行者が最初に出会うボストンである。空の玄関ローガン国際空港から、ボストン・ハーバーを越えた先に見えるボストンのダウンタウンは、まるでマンハッタンにも似た摩天楼の都市だ。仮にバスやタクシーでボストン・ハーバーの海底トンネルを抜けてダウンタウンへ入ろうとすれば、その印象はもっと強烈かもしれない。まさに目の前に覆い被さるように高層ビルが立ち並ぶ光景を誰もが目にするからである。特にこの数年間のボストンの変貌は著しい。独立に燃えた激しい気性は、今日のボストンにも脈々と息づいていて、都市改造の情熱を駆り立てているのだろう。

しかし、ボストンにはもう一つの別の表情があることも忘れてはならない。200年前の建国の精神をそのまま保存しているような伝統的なまち並みが、高層ビル街と並んでいまだにその存在を堅持しているのだ。ピューリタニズムの清貧で、勤勉な精神的風土がつくりだすある種の知的な雰囲気。成熟した都市だけがもちうる深みのある味わい。こうした独特な情感を醸し出すまち並みが、あたかも高層ビルの軒を借りるように、一つのテリトリーを形成しているのである。

ボストンのまちがわれわれを魅了するのは、おそらくこの相反する二つの側面を合わせ持っているからであろう。革新性と保守性の共存、しかしそれは既に都市形成の端緒から見いだされるものであった。

ボストンのロウハウス——。歴史の風雪を耐えてなお生き生きとその存在感を示そうとしているかのように、赤れんがの肌理を陽光に

眩しく反射させている住宅群、これがロウハウスである。

都市と住宅との結接点であるロウハウスは、都市とそこに生き暮らす人々の生活に橋渡しをする役割を長い間演じ続けてきた。言い換えれば、ロウハウスとは都市に住むための、都市に暮らすための一つの大原則である。そのロウハウスの原点ともいえる姿がボストンに生き続けているのだ。

ロウハウスを語るためには、どうしてもチャールズ・ブルフィンチに触れないわけにはいかない。ボストンにおける最初のアメリカ生まれの建築家であったブルフィンチが、ボストンに初めてロウハウスを計画したのは1793年であった。既に現存しないその最初の計画案「トンティン・クレセント」は、当時のロウハウスの設計としては驚くほど先進的なものであったという。ただ、湾曲した立面が中央の植栽を囲むアイディアや平面計画は、当時のポストニアンにはあまりに高級すぎて、事業としては失敗に終わったと言われる。しかし、この試みは19世紀初頭のボストンにみごとに花開くことになるのだ。

ハーバード大学を卒業後ヨーロッパを遊学して帰ったブルフィンチの心をとらえたものは、18世紀末のパリやロンドンの都市居住のスタイルであった。彼は都市として胎動をはじめたボストンをそうしたヨーロッパの先進的な都市のように改造したかったのである。ブルフィンチを突き動かしたのは、やはりピューリタンの自由への強い渴望であったといえる。その意味から言えば、現在でこそ伝統的なまち並みを形成しているロウハウスではあるが、誕生期において、まさしく革新性に満ちた都市・建築の新たな冒険であったのだ。



上3点共：ロウハウスにとって、窓は外観を演出する重要な役目。ピーコン・ヒルにて
下：窓を補修している現場に出会った



連続するボウ・ウィンドウが、家並みにリズムを与えて美しい。ルイスヴァーグ広場前のロウハウス

BEACON HILL

都市居住の原点

尾根状に広がる高級住宅街ビーコン・ヒル。

イギリスのタウンハウスの伝統を踏襲したかに見える家並みは、品格をそなえ優雅でさえある。

ブルフィンチは、そこにパラッツォの考え方を取り入れた。



中世都市の味わいすら感じさせる路地

左：ピアノ・ノービレの最初の意欲作パーク
ロウ(1805)。階段中心という平面計画も、ボ
ストニアンを驚かしたという
中：59マウントバーノン通りの住宅(1837)。
イオニア式コラムとペディメント(三角形の
切妻壁)を配したボウ・ウィンドウ
右：壁面には花崗岩が使用された地下。一層
目にはめ込まれたアーチは、ブルフィンチの
好みの意匠



ブルフィンチのロウハウスの思想が結晶した作品にパークロウがある。ボストン・コモン
の脇という恵まれたロケーションに建てられ
たパークロウ。その特徴の一つ挙げるとすれ
ば、その窓にある。アーチが彫り込まれた花崗
岩の一層目の上に、れんがの壁面を持つ二層
目の窓が大きくとられているが、ここにブル
フィンチはバルコニーを取り付けた。平面計
画で言えば、この二層目にポイントにおいて
住宅の最も重要な役割を持たせたのである。
彼はそれをイタリアのパラッツォの伝統的形
式である“ピアノ・ノービレ”に求めたのだ。
ピアノ・ノービレ——、機能とデザインの両
面から住宅の二層目に核を置くこの考え方は、
ヨーロッパに古くからある形式だが、ブル
フィンチは産声をあげたばかりの都市ボス
トンに、それを大胆に導入したのである。眺
望だけでなく、防犯、衛生の上でも優れてい
るピアノ・ノービレは、瞬く間にボストンの
ロウハウスに取り入れられ、以後特にその垂
直的動線を強調する外観は、ボストンの一つ
の重要な顔としての役割を持つことになるの
である。

ロウハウスによるまち並みが、今日最も美し
い都市景観をつくりだしている地域がビー
コン・ヒルだ。もともと丘陵地であった所を埋
め立てのために切り崩し、新たに住宅用とし
て開発されたビーコン・ヒルは、アメリカ全
土の中でも第一級のレベルを誇る住宅地であ
る。ブルフィンチによって意図されたロウハ
ウスの思想が、まさにまちとしてのスケール
で展開されている様を、われわれはここで目
にすることができる。

ブルフィンチ自身も、この場所に幾つかの作
品を残している。29Aチェストナット通りの
住宅、スワンハウス、セカンド・ハリソン・グ

レイ・オーティス邸などであるが、いずれ劣
らぬ銘品ぞろいだ。特にポーチにダブル・コ
ラムを配したスワンハウスは、国の保存指定
を受けている、ビーコン・ヒルを代表する建物
である。地下一層、地上四層は、一層目にレ
セプション・ホールとダイニング・キッチン、
二層目が問題のピアノ・ノービレ、三層目に
寝室、四層目が召し使いの部屋という構成。
ブルフィンチが、二層目を最も重要な箇所と
考えたことは、スワンハウスを見れば明らか
だ。天井を高くとったサロンにあてられ、窓
には錬鉄の手すり取り付けられている。優
雅でありながらも、ピューリタンの精神が滲
み出たような地味なデザインでまとめられて
いて、見るものに清楚な印象を与える。
また、セカンド・ハリソン・グレイ・オーティ
ス邸はブルフィンチの住宅における理想が最
も強く表現された作品。広い庭を持つ戸建て
形式のこの住宅は、当時には実験的すぎて普
及するには至らなかったが、二層にわたるコ
リント式のピラスター(付け柱)が正面性を強
調し、アーチによる窓の意匠と相俟って、独
特の品格を表わしている。

ビーコン・ヒルが都市居住の模範といえる理
由は、もちろんその美しいロウハウスのまち
並みだけではない。都市に住むための仕掛け
が随所に込められているからだ。たとえば、
ロンドンのスクウェアをモデルにしたルイス
ヴァーグ広場が、住宅建築と同時に計画され
たという事実を挙げるだけでも容易に納得でき
よう。ロウハウスに周囲を囲まれるかたちで
計画された組合管理方式のこの広場は、都市
に十分な人間的なやさしさを提供している。
まさしくここには、都市に暮らすための最も
重要な原則とでもいうべきものが、息づいて
いるのである。



上：スワンハウス(1805)。新しく白く塗られたダ
ブル・コラムが目立つ
中：ルイスヴァーグ広場(1840)。住宅所有者だけ
がこの公園の鍵を開けられる
下：瀟洒な邸宅セカンド・ハリソン・グレイ・オー
ティス邸(1802)

CLASSICISM

アメリカ様式建築の競演

19世紀末から20世紀初頭にかけて一世を風靡した古典主義。

ボストンには、アメリカを代表する古典主義の建築物が数多く残されている。

ヨーロッパの伝統、とりわけその様式を重視したことによって様式主義とも言われた古典主義は、ポストモダンの時代になって再評価の機運が高まっている。



マサチューセッツ州議事堂(1797) ドームはたびたび修復されているが、最も最近の修復は'69年に36,000ドルかけて行われた



クインシー・マーケット(1826) ファニエル・ホルの裏側にあり全長160mにもおよぶ三棟が並ぶ。設計はアレクサンダー・バリスによるもの

ボストン・コモンからビーコン・ヒルの方向を眺めると、^{さんぜん}燦然と輝く金色のドームをいただく建物が目に飛び込んでくる。ちょうどボストン・コモンの北側でビーコン・ヒルの頂上に位置しているために、その存在感は圧倒的で、今でもボストンのまちのランドマークの役割を十分果たしていると言える。

ボストンの建築の中でも、シンボリック的存在ともいえるこのマサチューセッツ州会議事堂こそブルフィンチの生涯の一大傑作だ。

れんがを用いた壁面、パラディアン窓(パラディオが好んで用いた半円形アーチを中央に両側に細い円柱を従える窓)、古典的なコリント式列柱などによる構成は、見る者に荘厳な印象を与える。ブルフィンチは、ロンドンのサマセットホーム(ウィリアム・チェンバレン設計)を範にしたと言われているが、彼はこの公共建築の設計によって正当な意味でのフェデラル様式(南北戦争時の北部装飾様式)を確立したという意味でも重要である。ただし、象徴とも言えるドームは完成した1797年当時はシングル(柿板)ぶきで、現在のように金色になったのは1861年からであるという。公共建築でブルフィンチがかかわったものにもう一つファニエル・ホールがある。この建物は、裕福な貿易商ピーター・ファニエルが1742年にボストン市に寄贈したもの。一度消失したが再築され、さらにブルフィンチによって増改築(1806年)された。ブルフィンチは当初3ベイ(窓の配列)であったものを脇に2ベイづつ足し、また上部に3層目を加えるなどして、フェデラル様式をより明快に打ち出している。

ボストンの古典主義建築を語る上でブルフィンチとともに重要な建築家と言えば、ヘンリー・ホブソン・リチャードソンと後にマッキム・ミード・ホワイトという設計事務所活躍

することになるチャールズ・フォレン・マッキムだ。ハーバード大学出身のこの二人の建築家は、アメリカ建築において古典主義を推進した代表的建築家であるが、ブルフィンチと並んでボストンのまちをみづくりにもおおいに貢献した。

リチャードソンの最も代表的作品がトリニティ教会。スペインのサラマンカ教会からインスパイアされたと言われるその外観は、当時流行していたヴィクトリアン・ゴシックを排して、あえてロマネスク様式を取り入れたもの。内部には三葉形のアーチをもった天井がつり下げられている。またおびただしい数のステンドグラスは、アーティストのウィリアム・モリス、バン・ジョーンズの協力によるもので、華麗な宗教空間の演出に一役買っている。一方、マッキム・ミード・ホワイトはアメリカ様式建築をリードし、千に近い数の作品を残したアメリカ建築史上最も多作な建築家集団である。数で言えばニューヨークが最も多いが、その代表作がボストンにある。トリニティ教会と隣接するボストン公共図書館がそれだ。パリのサント・ジュヌビエーブ図書館やルネサンス期のアルベルティ設計のサン・フランチェスコ教会を参照した立面は、まさに知の殿堂ともいえる威厳に満ちたたたずまいを見せている。また、大階段に導かれて二階に行くと、巨大なヴォールト天井に覆われた閲覧室が出現するという劇的な展開によって、バロック的空間を出現させた手法は、マッキムの名前を不動のものにしたと言われている。

もちろんここで紹介したものはほんの一例であって、ボストンを歩くとそれこそそこかしこでそうした古典主義をまとった建築物に出会うことができる。ボストンは、アメリカ建築様式のまさに生きられる博物館なのだ。



トリニティ教会(1872) リチャードソン34歳の作品。ギリシア十字形の平面の重心部分に重厚な塔がそびえる



左から順に
左：ボストン公共図書館は現在修復中。増設された部分はフィリップ・ジョンソンの設計
2番目：旧市庁舎(1865) 典型的なフランス第二帝政様式の建物。アーサー・ギルマン他の設計
3番目：ユニバーシティ・ホール(1814) ハーバード大学にあるものでブルフィンチの設計
右：メモリアル・ホール(1874) アメリカでは珍しいヴィクトリアン・ゴシック様式の代表的作品。屋根の多彩色タイルはラスキンの教えによるもの。ウェア・ヴァン・ブランの設計

POSTMODERN BUILDING

歴史を蘇らせる

ボストンの高層ビル群は、どれも表情豊かだ。特に70年代後半以後建てられたものは、それまでのモダニズム建築にはない温かみや楽しさが溢れている。ネオ・クラシズムの顕現とも言える、意匠の豊饒なる戯れ。高層ビルでありながらも、その表層には歴史に対する深い思いやりが感じられる。



ロウズワーフ 主棟部分。後方に見えるのはフィリップ・ジョンソン設計のインターナショナル・プレイス。パラディアン窓のパターンが面白い

ボストンというまちに滞在していると、確かにピューリタンの精神が息づいていると思える時がある。古典主義の建築物の前にたった時などは、特に強くそう感じるものだ。伝統を重んじる姿勢が極端な形で出てくると、それは革新を恐れる臆病な保守主義者の振る舞いに見えてしまうものである。もちろん、ボストンにもそうした面がないわけではない。伝統主義への過剰な傾斜は、まさしくそうした意識の現われであろう。ただボストンの場合は、たとえそういう意識が表面化しても、それをまた新たな創造へと転じるエネルギーのようなものが存在するように思える。ピューリタンの精神は、伝統に対して頑固ではあっても、ひとたびその魂に炎がともされれば、情熱をもって突き進んでいくような純真さも持ち合わせている。最初に言ったようなこの二面性こそボストンのまちを、またボストンの建築を魅力あるものになっている秘密である。

新しいものとは、生まれたときから既に陳腐化する危険性をもっている。ただ新しいだけでは、その後に生じるさらに新しいものによらずに凌駕されてしまう。新しいものであってもそこに十分な伝統への配慮があれば、それは陳腐化を逃れることができる。古いものと新しいものが同一の場所を占める。革新的でありなおかつ伝統への思いやりも忘れないこと。建築における歴史への配慮とは、つまりそうした建築という存在を永遠に古びさせないための一つの方法論なのだ。建築におけるポストモダニズムの思想が、常に歴史という文脈への参照として表現される意味はここにあると言える。

古典主義への参照から自らの建築をつくりだしていったブルフィンチやリチャードソン、マッキムらといった先達の努力は、その意味で言えば現在の高層ビルの設計思想に受け継がれている。ポストモダニズムの潮流と波長を合わせたかたちで建設された70年代後半以後の高層ビル群は、どれもじつに表情豊かだ。しかもその外観には、古典主義を意識したデザイン言語がちりばめられている。先人が用

いた方法論が、今また最新の技術で建ち上がるビルディングに形をかえて現われているのである。

最後に数あるボストンの高層ビルの中で、そうした歴史への配慮が感じられる作品をいくつか紹介しておこう。まず、ボストン・ハーバーに面したウォーター・フロントに'88年建設されたロウズワーフ。ホテル、オフィス、飲食店からなる一大複合体であるこの建物は、主棟と海岸に指を伸ばした形で伸びた三つのウィングから構成されている。そのドームをいただいた主棟にポッカーリとあいたプラザから海が見えることもユニークだが、なによりもマッキム・ミード・ホワイトを思い起こさせる外観が特徴的。その古典主義への傾斜は、まさしくボストンの建築史そのものを反映していると言える。

同じく'88年建設の75ステイト通りビル。金色の意匠がシンボリックに輝く姿は、州会議事堂へのオマージュであろうか。装飾性を強く意識したその姿は、ポストモダン建築の典型。低層部に通過可能なギャラリーを持つなどの工夫が見える。

グロピウスの参加したTACが設計し、'87年にパブリック・ガーデンの隣に建設されたヘリテージ・オン・ザ・ガーデンは、一連のポストモダン建築の中では白眉ともいえる作品だ。三個の角錐をいただき、外壁にれんがを用いたこの建物は、周囲の環境に溶け込んで、現代建築だということさえ忘れさせるような落ち着いた雰囲気を出している。古典主義の参照という意味で、最も豊かな創造性を発揮した作品だと言える。

今やボストンの顔になりつつある巨大高層ビル群。ピューリタニズムのいい意味での歴史への傾倒は、こうした最新の建造物にも深いレベルで影響を与えているのである。

参考文献：『ボストン建築探訪』小林正美、『アメリカ様式建築の華』小林克弘、いずれも丸善、『デザインされた都市：ボストン』雑誌PROCESS 97 神田 駿・小林正美編、プロセス・アーキテクチャ



上から順に
上：ヘリテージ・オン・ザ・ガーデン 左側のグリ
ーンがパブリック・ガーデン
2番目：ザ・ニュー・イングランド('89～) 設計は
第1期工事 J.B.A with フィリップ・ジョンソン、
第2期工事 ロバート・スターン
3番目：75ステイト通りビル 設計はグラハム・ハ
ンド・アーキテクツ、S.O.M.
下：ギャラリー部分



パークサイド・ウェスト('98)
設計はカノン・アソシエイツ

古きよきボストンとボウ・ウィンドウ

小林正美

ボストンというまちがアメリカの他の都市とは幾分異なっていることは誰しも容易に気づくところである。車も入れないような石畳みの曲りくねった街路、れんが色の美しいリズムある歴史的町並みは、どちらかというところヨーロッパ中世都市的な味わいに近いものがあるが、こうした街区と近代的超高層ビルが林立する街区が平和に共存している情景こそが現代ボストンを最もユニークにし、また魅力的にしている点ではないだろうか。ボストンを語る時に、美しい都市景観に加え、その背景としての精神的風土を忘れてはなるまい。それは、このまちが単に古いということ以上に、アメリカ人の心のふるさととも呼ぶべきピューリタン(清教徒)的伝統を抱えている点である。まち全体が今でも持つ清貧で家族的あるいは知的な雰囲気は、恐らくはこの伝統に負ったものである。18世紀から19世紀にかけて同時期に発展した東部港湾都市の一つであるフィラデルフィアがクウェイカー教徒による宗教都市であり、またニューヨークがオランダ人による商業都市であったことに比べ、ボストンは大きく異なった都市の発展形式を持ったのであった。

ボストンのまちの歴史は、大きく分けて17～19世紀の港湾都市として繁栄した時代、20世紀初頭の衰退期、第二次大戦後の大再開発事業と、ここ20年余りの金融都市としての繁栄期に大別することができる。現在もよく保存再生されている歴史的街区の成り立ちについて簡単に振り返ってみることにしよう。

ボストンの歴史はもともとショウマットと呼ばれる小さな半島から始まる。ロクスベリー地区と細いネックで結ばれた島状の半島は、三つの急な丘を配し、ニューイングランド地方独特の氷河期以来の起伏に富んだ地形を代表していた。その後のボストンの歴史は人口の集中にともない、これらの三つの丘を切りくずし、周囲に埋立地を獲得することを繰り返すという都市改造の歴史であったと言ってよい。3世紀に渡る格闘の末、ボストン

はようやく現在のような平坦な土地を確保することができたのであった。ボストンが再開発の町と呼ばれる由縁である。

丘状の半島に最も早く足を踏み入れたのは、英国国教会の牧師であるレベレンド・ブラクストンであった(1625年)。その後1630年秋にジョン・ウィンスロップ率いるピューリタンたちによるマサチューセッツ・ベイ・カンパニーの人々が半島に上陸し、あらたにコロニーが形成されることとなる。ピューリタンたちは、現在ノース・エンドと呼ばれる地区や中央ビジネス街の辺りに定着し、以後約100年の間はここが人口集中の中心となった。

18世紀はじめ頃までにボストンの人口は12,000人にまでふくれあがり、北米一の都市に成長している。多くの造船設備と共に、港湾設備も当時の全米の中ではぬきん出ているのである。その後18世紀を通じてボストンは安定した発展を続け、黒人奴隷の輸入や東洋の珍しい物品などを荷受けする三角貿易中継地として栄えることができた。18世紀になると、いよいよボストンは独立運動の重要な舞台の役を努めることとなる。イギリス兵が衝突し、5人のボストン住民が殺されたいわゆる「ボストン虐殺事件」は1770年3月5日に起こり、またいわゆる「ボストン茶会事件」は1773年12月16日に起こっている。これらの事件は、やがて1775年から始まる独立戦争、1776年のトーマス・ジェファーソンによる独立宣言、1781年の戦争終結という一連のアメリカ独立のドラマへ繋がる端緒をつくることとなったのである。

19世紀に入るとボストンは、その経済的繁栄をバックに次々と都市施設や住宅地を建設し始めることとなる。この時、常に先導的な役割を果たしたのがチャールズ・ブルフィンチであった。彼はボストンにおける最初のアメリカ生まれの建築家で、若いながらもトンティン・クレสเซント(1793)、マサチューセッツ州議事堂(1797)、スワンハウス(1805)、パークロウ(1805)、とたて続けに歴史的にも

重要な建物を手がけている。彼はハーバード大学卒業後、ヨーロッパを旅し、その建築文化の高さに衝撃を受け、帰国後、当時まだコロニーであったボストンを一般の都市にしようと試みるのであった。したがって彼の手がけた住宅には、それまでの自然発生的に建てられた普通の住宅とは異なり、初めて二階に居間として「ピアノ・ノービル」を置くなど、一種独特の気品を感じさせる配慮が見られる。「ピアノ・ノービル」とはイタリアのパラッツォ(都市住宅)に伝統的に見られる形式で、住宅の二層目を最も優雅な階とし、機能的にも意匠的にも重要な役割を持たせたものである。ブルフィンチはそれまで単に住むことだけが目的とされていたボストンの住宅に新たな眺望を与え、社交生活を楽しむ居住文化を初めて紹介したのであった。一般のロウハウスによく見られる出窓も、眺望や通風を得るための装置であり、基本的にこの伝統にのっとったものである。ニューヨークやフィラデルフィアではオリエル・ウィンドウという八角形の一部のような平面をした出窓が好まれたのに比べ、ボストンでは圧倒的に「ボウ・ウィンドウ」という丸い形の出窓が好まれ、いつしかこの型の住宅がボストンの代名詞ようになってしまった。

「ボウ・ウィンドウ」の起源について少し触れておこう。当時、イギリスでは、19世紀に流行したパラディアン様式の平坦な立面への嗜好と、1823年から1851年に施行された奇妙な「ウィンドウ・タックス」という法律のために、出窓は一般的に控えられていた。この悪名高い法律は、六つ以上の窓を持つ家には税金がかかるという現代の環境学とは全く逆行する内容であった。いわば「光と空気を得るための税金」は、当然のごとく不評を買い、短期的に廃止される運命となったのである(アメリカには同様の法律が存在したという記録はない)。

「ボウ・ウィンドウ」の「ボウ」は弓を曲げたような形からその名があるが、イギリスで

は主として海岸沿いの町に建てられたテラスハウスに初めて用いられたとされている。海の近くでは居住条件として、快適な通風と海に対する眺望が何よりも重要であったからである。逆にロンドンのような大都市ではあまり人気がなかった。「ボウ・ウィンドウ」の持つ幾分かカジュアルな雰囲気が大都市には余り受け入れられなかったのであろう。窓の形式としては17世紀にオランダから紹介された上下げ窓が採用されていたが、これらは防火条例のため窓の奥の方に取り付けられることが多かった。これは、そのままボストンにも引き継がれ陰影に富んだ表情を生む原因ともなった。

ボストンで初めて「ボウ・ウィンドウ」が採用されたのはブルフィンチによる29Aチェストナット通りの住宅(1800)である。その後ビーコン・ヒルの開発で多用され、一般の強い人気を得ることができた。特にルイスヴァーグ・スクウェアに面する連続した「ボウ・ウィンドウ」のまち並みは全米一の美しさを示しているといっても過言ではない。この住宅地では、アメリカで初めて住民による管理組合が結成され、中央の公園を共同管理するルールが生まれたのである。この美しい公園の緑をできるだけ楽しむためにデザインされた「ボウ・ウィンドウ」は、その形態と機能が最も生かされ幸せそうに見える。海岸沿いのリゾート地に起源を発する「ボウ・ウィンドウ」は、海を渡りボストンでは都心の最も格調ある住宅地のハイライトとして生き返ったのであった。

たまにボストンのまちを訪れるたびに、ロウハウスの「ボウ」は時に恥かしそうに、時にうれしそうに私に語りかけてくる。各々の窓には各住人の歴史と英国以来の伝統を感じさせる表情があり、それは我々が忘れかけてしまっていた建築と都市の幸せな関係をも示してくれるのである。

(こばやし・まさみ／アルキメディア設計研究室所長・建築家、明治大学専任講師)

● ボストン美術館

Museum of Fine Arts

パリのルーブル、レニングラードのエルミタージュ、ニューヨークのメトロポリタンと並ぶ四大美術館の一つに数えられている、言わずと知れた超有名美術館。

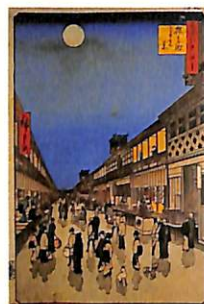
130年あまりにわたってヨーロッパ大陸、アメリカ大陸、アジア全域、そしてエジプト、ギリシア・ローマと地域的・歴史的にくまなく収集された収蔵品の数は優に百万を超えるといわれている。まさに地球規模の美術館だ。

まずボストン美術館といえば浮世絵のコレクション。日本国内でも容易に見ることのできない歌麿、北斎、広重らの作品は5万点にものほり、世界一の規模である。コレクションがあまりにも膨大で、一度にすべてを展示することが不可能なために、2〜3週間ごとにテーマや作者を絞って展示している。取材時は、広重の「名所江戸百景」が展示されていた。

他に国宝級といえる鎌倉時代に描かれた「平治物語絵巻 一卷 三条殿焼き討ちの図」平安時代の「吉備大臣入唐絵巻 四巻」の二種の絵巻物、また安土桃山時代の狩野永徳



上：ボストン美術館 下：ボストン美術館西館



広重「名所江戸百景」



モネ「日本衣裳の女」

による「龍虎図」、元禄時代の尾形光琳による「松島屏風絵」がみもの。工芸品では特に日本刀のコレクションがきわだっている。もう一つ見逃すことができないのがヨーロッパ絵画のパートの印象派の部屋。世界でも有数を誇るヨーロッパ絵画のなかでも、印象派のコレクションは秀逸な作品が多く人気が高い。クロード・モネの「日本衣裳の女」「睡蓮」は彼の記念碑的作品。またルノアールの「ブーヅヴァルの踊り」ゴーギャンの「われわれはどこから来たか、われわれとは何者か、われわれはどこへ行くのか」も二人の代表作といっていいただろう。特にモネの作品は40点を超え、フランス以外では最も多いコレクションである。'81年にはI.M.ペイが設計した西館が加わった。

開館時間：火曜、木〜日曜日10：00〜17：00
水曜日10：00〜22：00 西館のみ木、金曜日17：00〜22：00 月曜日休館
特別展示ギャラリーへの入り口は閉館時間30分前に、その他のギャラリーの入り口もすべて10分前に閉まる。

料金：大人6ドル(780円)、学割、シニア5ドル(650円)、6〜17歳3ドル(390円)、6歳以下は無料、また毎週水曜16：00〜18：00は無料 ※1ドル=130円で計算

● ハーバード大学美術館

Harvard University Art Museums

美術部門の調査研究のために収集された美術作品を展示することを目的に創設された美術館。三つの美術館から構成されている。

フォッグ美術館

Fogg Art Museum

1階はイタリア・ルネサンス、バロック、ロココ期などの作品が展示されているが、特に印象的なのは2階だ。ルノアール、セザンヌ、モネ、ドガら印象派に混じってロセティやターナー、また青の時代のピカソの作品が何のてらいもなく展示されている。とても大学が経営する美術館とは思えない充実度である。それぞれのコーナーにはMacintosh(コンピュータ)が設置されていて、ハイパーカードによって図書館に収蔵されている100万点の美術作品の写真・スライドを自由に検索でき、また展示作品の解説テキストをよびだすことができるようになっている点もユニークだ。建物はクーリッジ、シェブリーらによって1927年に設計されたもの。



モネ「サン＝ラザール駅」



セザンヌ「蜜柑のある静物」

ブッシュ・ライジングガー・美術館

Busch Reisinger Museum of Central Northern European Art

中央、北ヨーロッパの美術を専門に収集した美術館としてはヨーロッパ以外ではここが最も充実しているといわれている。スイス、オーストリア、ロシア、フランドース、

スカンジナビアと20世紀ドイツの美術が中心。特徴的なのはバウハウスの出身者の作品が多数収蔵されていることだ。クレイ、ベックマン、カンディンスキーらの絵画、版画、素描が展示されている。

アーサー・M・サックラー美術館

Arthur M. Sackler Museum

三つの美術館の中では最も新しい美術館。ギリシア・ローマ、古代中国、中近東のコレクションが中心。

建物はジェームス・スターリングの設計。彼はケンブリッジのクインシー通りに並ぶ建造物から意匠を引用している。メモリアル・ホール of 多彩色タイル、ガント・ホールの列柱、大学校舎のジョージアンの雰囲気それぞれ引用して、その意味ではハーバードに建った唯一のポストモダン建築だといえるかもしれない。

開館時間：月〜土曜日9：00〜16：30 日曜日13：00〜16：30 1月1日、サンクスギビング、クリスマスは休館

料金：3館共通大人6ドル(780円)



アーサー・M・サックラー美術館

● 科学博物館

Museum of Science

体験型の科学博物館。館内は展示ホール、ハイデン・プラネタリウム、ムガー・オムニシアターの三つのセクションからなる。展示ホールは、天文学、人類学、地球科学、光学、医学、数学といった自然科学の諸領域ごとに部屋が分かれていて、実際にモノに触れ動かして考える、という作業の中で科



上：科学博物館 写真は新設されたムガー・オムニシアター TSA設計('87) 下：人体の展示

学を理解しようという展示方法がとられている。

ハイデン・プラネタリウムは、科学博物館の目玉の一つ。プラネタリウムとレーザーショーを組み合わせたプログラムが1時間



恐竜の展示

おきに行なわれている。

ムガー・オムニシアターは、4階建ての高さをもつ巨大スクリーンと84個のスピーカーによる映像ショー。

ミュージアム・ショップは子供用のグッズ類から専門家のための実験器具まで豊富に品揃えされている。今年は、スタートレックのキャラクター商品やエッシャーの作品をデザインしたグッズ類が人気をよんでいるようだ。

開館時間：火曜〜日曜日9：00〜17：00 金曜日のみ9：00〜21：00 月曜日、サンクスギビング、クリスマスは休館

料金：展示ホール、オムニシアター、レーザーショーはそれぞれ大人6ドル(780円)、子供4ドル(520円)
3種の中から2種を選択する場合 大人9ドル(1170円)、子供6.5ドル(845円)
3種すべてを選択する場合 大人12ドル(1560円)、子供11.5ドル(1495円)
またプラネタリウムのみの場合 大人5ドル(650円)、子供3.5ドル(455円)

● MIT博物館

MIT Museum

MITの運営する博物館。さすがMITと納得するようなユニークな展示を試みている。まず建物は、いわゆるどこにでもある学校の校舎のようなたたずまい。展示のイントロダクションから驚かされる。数種類のプラズマを発生する球体が暗やみに幻想的な光を放射している。それに触れると、そのプラズマがまるで触れた皮膚に吸い込まれていくように変化するという具合。ストロボスコープの実験や幾何学の展示も目を見張るものがある。

MITだけのことはあって、都市計画や建築の企画展示も常時行なわれている。取材時には、MITの建築学科の教師ウィリアム・ロバート・ウェアのドローイング展が開催されていた。

このミュージアム・ショップはマニア向けで面白い。

開館時間：火〜金曜日9：00〜17：00
土、日曜日13：00〜17：00
月曜日は休館

料金：大人2ドル(260円)



建築ドローイングの展覧会

ボストンの都市と建築を知るキーワード

■ ショウマット半島

ボストンは、もともとショウマット半島というニューヨークのセントラルパークほどの大きさの島状の半島から拡大発展したまちである。海にいくつもの栈橋をかけ、その間を埋めて海岸線を延ばし、さらに入江を開くためにビーコン・ヒルの頭部など丘陵地帯の頂上部分を削り落とした。ビーコン・ヒル、バック・ベイ、サウス・エンドといった住宅街は、実はこうしてできた造成地なのである。

■ ボストン・コモン

ダウンタウンの中心に位置する緑地で、アメリカ最古のもの。コモン(common)とは、公有地のことで、植民地時代にピューリタンのために購入され、一時は放牧地や軍隊の訓練場として使用されたこともあったという。約48エーカー(=19.4ha)の敷地内には、セントラル墓地、フロッグ池、観光案



ボストン・コモン

内所があり、フリーダム・トレイルはここを出発点とする。週末には各種のイベントで賑わう。チャールズ通りをはさんだ隣はパブリック・ガーデン。一見同じような緑地だが、こちらはれっきとした植物園。ボストンの風物詩スワン・ボートとチューリップ園があるのはこっちのほう。

■ チャールズ・ブルフィンチ

Charles Bulfinch (1763~1844) ビーコン・ヒルにおけるロウハウスの建設は、ブルフィ

ンチの存在なくしてはありえなかった。彼が理想に掲げた居住環境は、パリやロンドンを範とするもの。ボストニアンに秩序ある都市型の住宅を提供することが彼の夢であった。

■ コブレイ・プレイス

トリニティ教会と公共図書館のはざまにある広場コブレイ・スクエアの南側に位置する巨大コンプレックス(設計はTAC、'84年完成)。9.5エーカー(=3.8ha)の敷地に5億ドルの工費を投じて建設されたものだ



コブレイ・プレイス・ショッピング街のアトリウムにある18mの滝

が、マサチューセッツ・ターンパイクの空中権(土地の高度利用を目的にある一定範囲の空間を利用できる権利)を利用したアーバン・コンプレックスのケース・スタディとして有名になった。二つのホテル、四つのオフィスビル、百以上のショップ、アパートなどが同居している。現在ではハンティントン・アベニューをはさんで並ぶ同じ巨大コンプレックスであるブルデンシャ



コブレイ・プレイス、高速道路の上に建っているのが分かる

ル・センター・スカイウォークと空中歩道でつながり、完結した一つの都市ともいえる様相を呈している。

■ 都市のイメージ

建築家であり、MIT都市デザイン研究所の初代所長を務めたケビン・リンチが60年に著した著書『都市のイメージ』(邦訳は'68年)で、ボストンはジャージー・シティ、ロスアンジェルスとともに都市デザインという観点から詳細に分析されている。『都市のイメージ』は、イメージアビリティという独特な概念によって都市を形態という視点からとらえようとした研究で、60年代以降の都市デザインに圧倒的な影響を与えたが、ボストンは明確な形態とある種の分かりにくさが混在するユニークな都市と分析されている。この分析は30年以上たった現在でも通用するもので、ボストンの都市としての魅力を的確に言い表しているといえる。

■ H.H.リチャードソンとマッキム・ミード・ホワイト

ボストンには、建築史で言う古典主義の記念碑的作品が幾つも残っているが、その代表的建築家といえばリチャードソン(Henry Hobson Richardson)とマッキム・ミード・ホワイト(Mckim, Mead & White)であろう。リチャードソンはエコール・ド・ボザール出身でいわゆるロマネスク風の作風で知られるが、その出世作といえるトリニティ教会がコブレイ・スクエアにある。その設計スタッフの一人で後にマッキム・ミード・ホワイトという設計事務所を設立するC.マッキムの代表作ボストン公共図書館は、ちょうどトリニティ教会の道をはさんだ対面に隣接している。ちなみに増築部分はフィリップ・ジョンソンの作品。

■ ハーバード大学とMIT

チャールズ川の対岸には、学園都市ケンブリッジがある。アメリカ最古の大学ハーバード大学と建築学科が最初に設立されたMIT(マサチューセッツ工科大学)を中心に、60以上の大学がこの地域にひしめいている。

建築的観点から見ても、この二つの大学には新旧の注目すべき建築が数多くあることで有名。たとえばハーバード大学には、ブルフィンチのユニバーシティ・ホール、リチャードソンのシーバーホール、ル・コルビュジエのカーペンターセンターなど、またMITにはボーズワースのマクローリンビルとロジャースビル、サーリネンのクレスグ・オーデトリウムとクレスグ・チャペル、アアルトのペーカー・ハウスなど。



上:カーペンターセンター(1963)
ル・コルビュジエがアメリカに残した唯一の作品
中:マクローリン、ロジャースビル(1916)
下:ペーカー・ハウス(1949)
アアルトのアメリカにおける唯一の作品



上:クレスグ・オーデトリウム(1955) 三点支持の美しいドーム
下:クレスグ・チャペル(1955)

■ W.グロピウス

ドイツ生まれの建築家Walter Gropiusは、バウハウスの指導者であったが、'37年にハーバード大学の教授としてアメリカに渡ってからは、アメリカ建築の近代化に尽力をそそいだことでも知られている。それまで支配的であったボザールの教育法を廃止し、バウハウスの総合教育によって徹底してインターナショナル様式を教え込んだといわれている。現在第一線で活躍するI.M.ペイやポール・ルドルフらはその教え子。また、共同体方式による設計事務所TAC(The Architects Collaborative)のパートナーとして実践的な建築指導を行ったことも特筆すべきであろう。

■ ファニエル・ホールとマーケット・プレイス

スミベールにより設計され、後にブルフィンチによって増改築されフェデラル様式の代表的建築となったファニエル・ホール。その向かい側に三棟並ぶ細長い建物が、アメリカ再開発史上最もトピックなファニエル・ホール・マーケット・プレイスである。19世紀港湾の荷受け場として栄えたその周

辺は、陸上交通への移行にともなって第二次大戦後まで荒廃を極めていたが、トンブソンとラウス社のチームによって年間1千万人が集まる大商業空間として蘇った。この奇跡とまで言われた成功は、歴史的建造物の修復・再生利用という手法を一種の流行現象にした意味でも重要である。

■ I.M.ペイ

ルーブル美術館ピラミッドで建築関係以外の人々にもその名をしられるようになったペイであるが、ボストンの建築にも重要な足跡を刻んでいる。MITからハーバード大学院へ進みグロピウスの直接指導を受けたペイは、コブレイ・スクエアのとなり



ジョン・ハンコック・タワー(1975)
空を取り込むカーテンウォール

に地上225m62階のジョン・ハンコック・ビルを建てた。トリニティ教会、ボストン公共図書館といった歴史的建造物の立ち並ぶ中であって、そのガラス・カーテンウォールの外観はひととき異彩をはなっている。また、中央部に長さ200mにもおよぶ人口池を横たえた四つの建物から構成されたクリスチャン・サイエンス・センター、みかげ石のテクスチャーが美しいボストン美術館西館などがペイの作品。



夜のクリスチャン・サイエンス・ホール(1973)